## 社会学的研究の視角・理論・方法における スキルアップと学術的展開

研究会メンバー: 竹松未結希(先端研)、加藤このみ(先端研)、巽美奈子(社研)、村上究人(社研)

## 研究会の目的:異なるフィールドにあらわれる社会問題の差異と共通点を認識することによって、学術的な展開と各自の研究活動のスキルアップをめざす

社会問題の研究者は、当該社会問題に関連する文献を読み、それを先行研究として位置付けて議論を進めることが多く、それだけでは社会問題のテーマをこえた学術的展開はしにくい。まったく異なる社会問題であっても、類似する現象が起きている場合があり、その発見は異なる社会問題を研究する研究者との議論によって容易になる。

➡そこで、本研究会は、社会学を専攻しつつも、社会学の異なる分野、異なる社会問題を研究対象とする院生が集まり、社会学の理論的研究や新しく刊行された学術文献を読み、相互に内容の理解の確認やディスカッションを行う。こうした文献の精読をとおして、社会学の視点、理論についての学びを深めるとともに、各個人のフィールドワークや論文執筆に活かすことをめざす。

**活動内容:**2 か月に 1 回の頻度で読書会を主とする研究会を実施する。読書会によって得られた社会学の視角、理論を自身のフィールドワークなど研究のプロセスに活用し、自身の研究計画、博士論文・修士論文・査読論文といった論文の執筆をめざす。

開催内容: 今年度は、以下の文献を扱い、通年7回の研究会を実施した。

第1回:大島岳, 2023, 『HIV とともに生きる——傷つきとレジリエンスのライフヒストリー研究』青弓社.

第2回:柏﨑郁子,2024,『〈延命〉の倫理——医療と看護における』晃洋書房.

第3回:アンジェラ・マクロビー(著)田中東子(監訳), 2023, 『クリエイティブであれ――新しい文化産業とジェンダー』花伝社.

第4回:高橋絵里香,2019,『ひとりで暮らす、ひとりを支える——フィンランド高齢者ケアのエスノグラフィー』青土社.

第5回:大嶋栄子,2024,『傷はそこにある——交差する逆境・横断するケア』日本評論社.

第6回:大江將貴,2023,『学ぶことを選んだ少年たち——非行からの離脱へたどる道のり』晃洋書房.

第7回:上田遥, 2024, 『食の豊かさ 食の貧困——近現代日本における規範と実態』名古屋大学出版会.

**成果:** 本研究会をとおして、社会学という共通のディシプリンにおいて研究活動を展開している点、各々のメンバーが異なる社会問題をテーマとしている点を活かし、以下の成果を得ることができた。

- 各自の研究領域で社会問題とみなされる出来事の差異と共通点の発見
- 社会学的なものの見方の習得
- 各自の研究領域における研究会によって得た学びの実践

さらに、課題図書を輪読し議論を重ねることで、それに派生するかたちで、より多くの良質な文献情報を得ることが可能となった。最終的に、修士論文執筆・博士論文執筆・査読論文執筆といった研究会活動当初に各々が設定した目標を達成することができた。